Newsletter No.21 2015, 5

## 新年度への期待

センター長:山田 利明



1月から3月にかけて、TIEPhでは、3回にわたってシンポジウムを開催した。本号ではその概要を報告しているので、詳しくは該当の記事をお読み頂ければ幸いである。

平成23年度より交付を受けた私立大学戦略的研究基盤形成事業としての活動は、本年度が最終年度となる。そのために、今年度は成果報告を兼ねたシンポジウム等を多く予定しており、エコ・フィロソフィの研究活動と教育実践の具体例を提示し得ることと思う。ただし、TIEPhの活動はこれで終了するのではなく、来年度以降も外部資金を得て研究を続けていくことになる。サスティナビリティ学構築の一端を担って以来、

10年が経過した。この間、TIEPhが公表してきた独自の成果と研究姿勢は、大きく評価されてきた。こうした資産を継承し活用するためにもさらなる展開を必要とする。

この5年間についていえば、サスティナビリティ・サイエンス・コンソーシアム(S.S.C.) の設立に参加し、和歌山県田辺市の南方熊楠顕彰館との相互協力、あるいは荒川修作事務所との共同作業など、全国規模の活動実績を残してきた。今年度も更なる大きな連携を作りあげていきたい。

かつての哲学は、紙とペンとによって生み出されてきた。ところが例えばレヴィ=ストロースのように、未開社会を体験することで、ひとつの理論を完成させた研究者が出た。それは例えばいま私たちが直面している気候の大変動の中から、いくつかの理論が生まれてきつつあることと軌を一にする。考える力、変革する力を示したい。

## 『自然といのちの尊さを考える ──エコ・フィロソフィとサステイナビリティ学の展開』刊行

自然観探究ユニット: 竹村 牧男

本書『自然といのちの尊さを考える―エコ・フィロソフィとサステイナビリティ学の展開』(ノンブル社)は、この前後 10 年ほどにわたるICAS(茨城大学地球変動適応科学研究機関)と TIEPh との共催による国際セミナーを中心とした共同研究活動の成果をまとめたものである。地球社会の環境問題やサステイナビリティの問題に対処するに、近年は技術的な方面では多大の成果を上げてきているが、やはり根本的には社会組織のあり

方や人間のライフスタイルを変革していく上で哲学・思想の確立が欠かせないことであろう。特に現代社会を主導してきた近代合理主義が基づく divide and rule(分けて支配する)の立場を見直す新たな文明原理の確立が、緊要の課題である。その人々への浸透は必ずしも容易ではないものの、私たちは地球の未来を拓く方向性を真摯に探究し、発信していく営みは欠かせないと考えている。本書はそのささやかな成



東洋大学「エコ・フィロソフィ」学際研究イニシアティブ(TIEPh)は、自然観探究ユニット、価値観・行動ユニット、環境 デザインユニットから構成され、さまざまな研究活動、シンポジウム、研究会を企画・運営しています。 果である。関心を同じくする方々にはご一読いただき、種々ご指導賜ることができれば幸甚である。 TIEPhの私立大学戦略的研究基盤形成支援事業としての活動は、2015年度でひとまず終了する。 しかし関係者のご理解・ご協力を得て、これまで積み重ねてきたエコ・フィロソフィ追究の活動は、 ICAS とも協力し合い、さらに続けていきたいものと思っている。特に若い気鋭の研究者が、この 重要な課題を引き続き取り組んで行ってほしいと思う。そのための環境が整うことを、ひとえに祈 念するものである。(本書序文より抜粋)

### 「大地の思想─風水・聖地・里山」シンポジウム

センター長:山田 利明



3月17日13時30分より、白山キャンパス6号館で、 風水・聖地・里山を主題にして、この3つを結びつける思想的探求を試みるシンポジウムを開いた。発表者は大形徹・大阪府立大教授(「中国の風水思想と洞天福地」)、宮本久義・東洋大教授(「思想としてのガンジス」)、田村義也・TIEPh 研究員(「南方熊楠と紀南の神社林」)、河本英夫・東洋大教授/TIEPh 研究員(「課題としての里山」)であった。大形氏は景観のもつ力、特に従来の風水説で説かれた気による択地ではなく、むしろ水流に重点を置いた地力を論じ、宮本氏もガンジス河のもつ宗教的な浄化作用を説く。また田村氏は、明治末年に起こった紀南における神社林の伐採に関わる南方の

反対運動から、神社林のもった作用を明らかにし、河本氏は里山の機能を論じて水の流れに及ぶ。 四者それぞれの立場から、いずれも水流・水の作用に及んだ。

確かに生き生きとした大地あるいはものを生み出す大地とは、潤いのある土地、緑濃い景観をもつ。風水やガンジス河、また神社林や里山をこのようにして重ねてみると、同じコンセプトの上に

異なった思想や宗教が構築されたとみることも可能である。そうなるとガンジスの沐浴と神社の禊祓、風水の水流と里山の水機能は基盤を等しくする。

照葉樹林文化帯という概念がある。北部インドからインドシナ半島、中国江南から琉球、九州に至る米作文化圏を指し、ここには餅、麹による発酵食品、味噌など共通する食品や歌垣、漆など共通する文化がみられる。そうなるとガンジスの沐浴と江南の禊祓、神社の禊川は一連の文化的基盤を語ることができる。水と文明の関わりを如実に示したシンポジウムであった。

(2015年3月17日開催)



## 国際シンポジウム「ドイツ文化とエコロジー」

環境デザインユニット:河本 英夫

ウイーン大学・哲学・教育学部の正教授 G.シュテンガー氏をお招きして、国際シンポを行った。シュテンガーさんは、間文化哲学をテーマとして掲げたヨーロッパの研究機関でも数少ない研究者であり、もちろん現在のドイツ語圏での最も優秀な哲学者の一人である。文化の現象学という観点での議論で、技術をどう考えていくかというところに焦点があった。ハイデガーの技術論、ハーバ



マスの技術処理を基本とする技術論等々を手掛かりにしながら議論が進められた。日本の職人の技術は、技芸とでも呼ぶべきもので、ヨーロッパとの違いは、美観や美意識との融合や手仕事の細かさにあると思われる。しかもどこかに手元仕事(ブリコラージュ)が含まれている。

河本英夫の議論は、農のありかたにかかわっていた。農は 自然の滋力を最大限に発揮させる試みであり、この一部が経 済的ネットワークと成り、農業と呼ばれている。農は緑地と 自然環境の維持にとって最大の推進力である。日本の農業の 展開を考えると、アメリカやオーストラリアではモデルには

ならず、むしろドイツをモデルケースとして複眼的に構想を立てていくのがよいと思われる。こうした議論を基調としている。

ヨーロッパ先進国の農業は、いずれも補助金によって支えられており、農業の維持はいつも難しい問題である。つまりモデルケースを作りながら、それを拡張するようにしてしか進んでいくことができない営みになっている。その意味でドイツと日本は、適合的なモデルを提供し合えるのである。バイエルン州で見られるエネルギー生産(メタンガスの生産)と農業を組み合わせた兼業農家の事例があり、成功事例として取り上げた。

山口一郎は、原発事故にかかわる議論を批判的に検討するスタイルの議論であった。日本の原発事故については、多くの検討と議論が展開されてきたが、そのなかの一つを取り上げて詳細に検討

するというものであった。原発事故のような規模の大きい事象を扱う論理的な仕組みの不備をしていく議論である。ここでは科学的データの扱いをどう考えるのかという難しい問題を避けて通ることができない。というのも原発事故のような問題は、事象の性格の上で、実験一検証を行うことができないからである。

3名のパネラーの発表の後、総合討論を行った。ヨーロッパと東アジアでの原発の扱いには大きな落差がある。原発は未成熟な技術だと考えて縮小していくヨーロッパと東シナ海沿岸にさらに原発が建設され続けている東アジアでは、どうしても議論に隔たりが出る。



エネルギー政策としては、再生エネルギー比率を増やしていくことにはまったく問題がないが、再生エネルギーは小さな装置を多くの場面で作り上げていく、多発的なネットワークにならざるをえない。 そこにネットワーク(システム)の組み立てとして多くの工夫が必要となる。

(2015年3月10日開催)

#### 福島視察報告

環境デザインユニット:武藤 伸司

2015年3月12日から13日にかけて、震災と原発過酷事故から4年経った福島の現状を知るべく、福島県の浜通り地方への視察を行った。視察ルートは、12日に福島市から相馬市へと東進し、今年3月1日から全線開通となった国道6号線を南下し、いわき市で1泊、そして、13日にいわき市の復興状況を視察し、郡山に戻って富岡町の仮設住宅を訪問するというものである。





国道6号線を南下する途中、南相馬市にあるソーラー・アグリパーク(一般社団法人福島復興ソーラー・アグリ体験交流の会)という、企業セミナーや、小中学校の生徒に対する体験学習を行う施設に立ち寄って、南相馬のエネルギー、農業復興の取り組みについて聴講し、その後、この法人の代表理事と様々な議論をすることができた。特にこの施設において特徴的なことは、復興アピールの単なるパビリオンではなく、子どもたちに向けての長期的な復興、発展への職業的動機付け、そして、企業に対する新たな農業モデルのビジネススキームを具体的に提示し、実行してい

る点である。土地柄において、また今後の経済活動の見通しについて、農業というのは欠かせない キーワードであるが、しかし農作物の栽培、流通には、多くの法的規制があり、実行が難しい。そ こで、この施設を運営している法人は、農業用地ではなく、工業用地を活用し、土地に関する規制 を回避し、また栽培した作物は、企業の一括買い上げという方法で、流通に関しても独自に行う方 法を採っている。こうしたビジネスによる収益を、ビジネスモデルの開発と子どもたちへの教育活

動と並行して行い、将来の投資としてのシステムの継続性を生み出そうとしていた。

いわき市内の復興状況を視察する中で、 特に小名浜港は、震災前の活気を取り戻し ていたことが印象的であった。そこでは、 津波対策と復興事業を兼ねた、新たな堤防 兼漁業施設の建設が行われていた。その後、 郡山市へと西進し、富岡町の仮設住宅群を 視察した。町役場の職員から、富岡町とい うコミュニティの再生が、時間の経過とと もに困難になっている現状を聞くことが できた。コミュニティは一定の形を維持す るには、単に人々が行政単位としての町に



所属意識を持っているだけでは限界があり、現実にどこか場所(土地)を必要とする。しかし富岡 町には既に土地がない。散逸していく町民の現状に、根本的な困難があると考えられ得る。

(2015年3月12日~13日)

# 即興ダンス・ワークショップ

環境デザインユニット:河本 英夫

即興ダンスセラピーを世界各地で展開し続けている岩下徹さんというダンサーがいる。山海塾 (天児牛大座長)のメンバーである。舞台での新作を作成中ということで、忙しい合間を活用して、 即興ダンスのワークショップをやってもらった。このときが岩下さんとは初対面である。身体は思



考と異なり、感じ取るしかない。それは知るという働きとは随分と異なる。 そのためさまざまなダンサーが、それ ぞれに身体の活用法をもっている。

岩下さんのワークショップは、まず全身から力を抜くことから始めた。力を抜くことは容易ではない。手を回転状にぶらぶらさせるところから始めるが、上半身に回転を与えるのだから

足はきっちりと踏ん張っていなければならない。その状態から床に寝そべってみる。そして立ち上がる。このとき自分の足、上体各所に力を籠めるが、さらに床の面から押されていることを感じ取るようにという指示が、岩下さんから出された。これはかなり難しい課題である。

通常歩行しているとき、地面に対して足を踏ん張るが、そのとき踏ん張っている足を感じ取ることはできる。しかし足を踏ん張ることができるのは、地面に押し戻されているからである。ニュートンの力学では、「反作用」に相当する。手で机を押してみる。押す感覚は誰にでもわかる。しかし机が動かないのであれば、机から同じだけ手は押されていることになる。この押されているという感覚は通常はもてないのである。それを回復するようにという環境を身体とともに回復していくのである。

寝転がったまま、アミーバーに成れというのが次の指示である。アミーバーを見たことのある人はほとんどいないと思うが、それでも誰であれアミーバーのイメージ



はもっている。ともかくもアミーバー状の動きをそれぞれがやってみる。そんなに簡単に身体は動いてはくれない。

こうしていろいろな動きから自分の身体を可能性を含めて感じ取ることを試みる訓練であった。 学生・教員も20名を限定して参加した。その後その日のまとめのようにいくつか要点について対談を行った。岩下さんの身体表現はとても洗練されたものである。しかしそのとき身体が本来もつ野性味、粗暴さ等々はどのようになるのか。それじたいは大きな課題であり、次回のワークショップに残しておきたい課題でもあった。

(2015年2月16日開催)

## 「第六回 人間再生研究会」

環境デザインユニット:稲垣 諭

2014年12月13日(土)に、東洋大学にて恒例になっている人間再生研究会が行われた。今回は、テーマを「記憶」として設定し、東京大学の野崎大地先生に講演をしていただいた。自然科学系の記憶研究は、人間での実験が倫理上難しいことと、余計な変数が多すぎることから、大半が動物実験にて行われている。しかも、言語的報告が動物ではできないため、宣言的記憶ではなく、非宣言的記憶(手続き記憶)の定量的変化を指標として実験は組み立てられる。野崎先生の発表では、サルにレバーを押させる課題を組み合わせることで、以前の運動記憶の





コンテクストが継続的に現在の動作遂行に影響を与えたり、あるいは課題の組み合わせに応じて以前の記憶をウォッシュアウトさせることができることが示された。これは、運動記憶には可塑性があり、それへの操作的介入が可能であることを意味している。リハビリ臨床といった現場に対応可能にするにはいまだ相応の時間が必要であるにしても、興味深い知見であった。



その後、TIEPhからは河本英夫研究員が「遂行的記憶」について、首都大学東京の池田由美先生が「認知運動療法における記憶の活用」について、それぞれ講演していただき、最後に富士リハビリテーション専門学校の三田久載先生と市川市リハビリテーション病院の月成亮輔先生による症例研究発表が行われた。

記憶の問題は、どこを出発点にするのかに応じて、

異なる経験領域を巻き込んでしまう。知覚と記憶、注意と記憶、情動と記憶、運動と記憶、どれを とっても記憶が関与しているように思えてしまう。記憶の輪郭を捉える試みは今なお大量の課題が 含まれており、今回の研究会はそれを再認するよい機会になった。

(TIEPh ホームページにて「第六回人間再生研究会」の一部の動画、資料がご覧になれます) (2014 年 12 月 13 日開催)

#### 天命反転トーク

環境デザインユニット:河本 英夫





環境を考えるさいに、身体の環境から考えていくのが基本となる。植物は、ほとんどつねに大地と地続きであり、大地の刻印を帯び、環境と一体になっている。環境条件が変われば、自分の身体を作り変えて適応していく。動物の身体は可動性の身体であるため、環境の変化に対しては移動をつうじて対応する。身体から考えていく環境論は、人間にとってかなり見えにくい領域でもある。というのもたとえば魚が周囲の水をどのように感じ取っているのかは、簡単には分からないからである。そうした場所から考察を進めていくために、身体表現をおこなっている人たちとの対話を試み、環境への感度を再生させていくことから開始したいと願っていた。

荒川修作+マドリン・ギンズのデザインした建築物が、三鷹にあり、天命反転住宅-In Memory of Helen Keller-と命名されている。今回、ABRF, Inc. (荒川修作+マドリン・ギンズ東京事務所)の

協力を得て、ここを会場としてダンサーの田中泯さんと対談することになった。ABRF, Inc.代表の本間桃世さんには、司会役を勤めていただいた。当日は、哲学科の学生を中心に、10 名強の参加者があり、その意味ではまたとない環境教育の会場ともなった。

田中泯さんは、ダンサーのなかでは比較的饒舌なほうだと感じられた。住まいと稽古場のある山梨で有機農業を営んでいる。当日は、もっぱら私(河本)が聞き役となり、田中泯さんに存分に話していただくようにした。田中泯さんは、ともかく話のなかで反応できる箇所を見



つけ、それを拡大するようにして話してくれた。ことに植物や食物の話では盛り上がった。

なぜ人間は踊るのかは、明確に語ろうとすると膨大な言葉が必要となるが、人間の踊るという本性は長い歴史をもち、そのなかで「踊る身体」とでも呼ぶべき歴史を継承し、それを前に進めていくという田中泯さんの自分自身の配置は、とても興味深いものがあった。というのも歴史的に継承されるものの代表は、科学的には遺伝情報と言語化された文化だが、実際には身体をつうじて、身体の動きによって継承されるものが大半だと考えられるからである。そしてそこに人間に固有の環境がある。

(2015年1月17日開催) (写真提供: ABRF, Inc.)

## ワークショップ「自然といのちの尊さについて考える」

研究助手: 岩崎 大



TIEPh 第一ユニット(自然観探究ユニット)が2006 年度より継続して行っている、茨城大学地球変動適応科学研究機関(ICAS)との共同研究は、一昨年度より、「自然といのちの尊さについて考える」という、環境問題においても、哲学においても根本的なテーマを据えている。2014年11月15日に開催した共催ワークショップでは、これまでの研究成果を書籍として刊行するために、執筆者を中心にした議論を行い、それぞれの内容を吟味するとともに、

改めて問題意識とその対応策を検討した。研究分野や世代を異にする研究者が集まってはいるが、これまでの国際セミナーでも、現代社会という特殊な社会構造における「尊さ」の文脈の希薄化が問題意識として共有されていた。今回のワークショップでは、自然科学的世界観では認識できない価値意識を別様の世界観によって導く可能性や、若手研究者が自ら体験してきた、関係性の欠如を引き起こす社会環境への危惧などが主な論点となった。自然といのちの尊さという自明なことがらが揺らぎつつある現代において、この自明性を回復するための哲学的実践が、これまでにないかたちでの環境問題への実践へとつながっていくということが確信できるような会であった。そしてこの会の議論を踏まえて、3月に『自然といのちの尊さを考える―エコ・フィロソフィとサステイナビリティ学の展開』を刊行する運びとなった。

(2014年11月15日開催)

## DVD作品「イノセント・メモリーー身体記憶の彼方へ」刊行

環境デザインユニット:河本 英夫



感情や情動の問題を映像化して作品とした。感情や情動にとって最大の難題は、それらの記憶である。この記憶の場面を有効に描けるような作品にしたいと考えていた。人間環境のもっとも緊要な要素は、感情の記憶である。精神分析医の十川幸司さんをメインの映像として、これまでの作品と同様に多彩な映像を活用して、作成した。今回は、夏目漱石「夢十夜」、レイモン=ラディゲ、バタイユ、川端康成『眠れる美女』等々の文章を活用した。映像作品は、私にとって7作目である。

制作プロセスについて説明しておく。テーマを決めて、まず台本を書く。これが原作と成り、それに必要な映像を実際に使うもの以上に多くのものを収集する。そこからコンピューターで作っていくのである。映画のような映像に仕上がっていくこともあれば、技巧を組み込んだルポのような出来となることもある。

(2015年3月刊行)

#### 2014年度の活動報告

4月

ニュースレターNo.18 発行

5月

TIEPh 共催 研究会(環境デザインユニット)

「ARAKAWA+GINS という経験-22 世紀身体論を目指して-」 場所:三鷹天命反転住宅

7月

TIEPh 主催 研究会(自然観探究ユニット)

場所:東洋大学6号館第3会議室

8月

ニュースレターNo.19 発行

八丈島地熱発電所および自然環境視察

(自然観探究ユニット、環境デザインユニット) 荒川修作関連施設およびニューヨーク・ボストン環境デ ザイン関連施設視察(環境デザインユニット)

9月

南方熊楠顕彰館および熊野古道視察

(自然観探究ユニット、環境デザインユニット) 2014 年度東洋大学「全学総合科目」として

全学総合 B『エコ・フィロソフィ入門』 開講 (~1月) 11月

TIEPh 共催 ワークショップ(自然観探究ユニット)

「自然といのちの尊さについて考える」 場所:東洋大学6号館文学部会議室

12月

ニュースレターNo.20 発行

TIEPh 主催 研究会(環境デザインユニット)

「第六回人間再生研究会」

場所:東洋大学 6 号館 6B15 教室

1月

TIEPh 主催 研究会(環境デザインユニット)

「天命反転トーク」 場所:三鷹天命反転住宅

2月

TIEPh 主催 即興ダンス・ワークショップ

(環境デザインユニット)

「身体の内発性」

場所:東洋大学白山キャンパス井上円了記念ホール

3月

「エコ・フィロソフィ」研究第9号、別冊第9号発行 ニュースレターNo.21発行

書籍『自然といのちの尊さについて考えるーエコ・フィロソフィとサステイナビリティ学の展開』 茨城大学 ICAS との共同刊行

DVD 作品『イノセント・メモリーー身体記憶の彼方へー』 発行

TIEPh主催 国際シンポジウム(環境デザインユニット)

「ドイツ文化とエコロジー」

場所:東洋大学6号館6404教室

福島被災地環境視察(環境デザインユニット)

TIEPh 主催 シンポジウム(自然観探究ユニット)

「大地の思想―風水・聖地・里山―」 場所:東洋大学 6 号館 6209 教室

活動報告会(評価委員)

#### 事務局からのお知らせ

- ・第一ユニット研究会(7月)および第六回人間再生研究会(12月)の模様は一部ホームページにて公開しております。3月開催のイベントについては、順次情報を公開していく予定です。
- ・2015 年度には書籍『エコ・ファンタジー -環境への感度を拡張するために-』(仮)の刊行を予定しております。環境問題そのものが抱える困難に処する新たなアプローチを、TIEPh 研究員やこれまで連携してきた研究者が、-般の方々に向けて語りかけます。

ニューズレター21 号 平成 27 年 5 月発行

編集 東洋大学「エコ·フィロソフィ」学際研究イニシアティブ(TIEPh)

住所:東京都文京区白山5丁目28-20 6号館4F 60458室 Tel&Fax:03-3945-7534 E-mail:ml.tieph-office@toyo.jpWebsite:http://www.toyo.ac.jp/site/tieph/